

平成六年度春期東洋学講座講演要旨

(華僑—過去・現在・未来—)

第四二二回 五月一七日(火)

歴史のなかの華僑

東洋文庫研究員
国際基督教大学教授

斯波 義信

一、歴史展望

華僑という漢語は一八八五年ごろから使われはじめたものであり、その背景としては、南京条約以来の国際公法にもとづく条約の締結につれて、主権・領土・国民(臣民)の規定が必要となった事情がある。本籍への登記を重んずる旧中国では、海外在留者は一時滞在者か亡命者とみなすので、これを漢語で華民とは呼ばず、永く唐人と称していた。清国が一八九三年に海外移民の禁をやめ、一九〇九年に国籍法を設けたことは、国の側から海外移住者をも臣民として公認する政策の動きである。これと同時に孫文らの革命派は、むしろ下から、移住者の愛国心に訴え、ここに

用語としての華僑が定着した。

用語の由来を右のように確認した上で、「唐人」を含めて中国人の海外移住者を華僑と汎称し、過去一〇〇年余りのその歴史を展望することは、現在、未来の状況をよく理解するために必要な措置である。華僑史は(イ)第一期(九一—一五世紀)中華海上世界の展開期、(ロ)第二期(一六一—一九世紀半ば)、西力の東アジア方面への参入の時期、(ハ)第三期(一九世紀半ば—二〇世紀半ば)、大量出国とナショナリズムの時期、(ニ)第四期(二〇世紀半ば—一九七〇年代)、ポスト・コロンIAL体制と摩擦の時期、(ホ)第五期(一九八〇年代—)、同化・共存への模索の時期、の五つの時期に分けられる。

では、こうした時期区分にかかわりながら、しかも華僑史の全体を貫流している問題史は何であろうか。ひと言でいえば、海洋活動を通じてアジアが普遍史ないし文字通りの世界史に組みこまれてゆくプロセスにはかならない。こうしたマクロ状況をもう少し限定していえば、(a)世界経済の曙光↓台頭↓展開にかかわる技術(生産・運送)と、物流と労力の動きという問題、(b)東アジア常民(海商、海民、移民)の歴史の復元という問題、(c)なおざりにされてきた西太平洋世界の交渉史の叙述という問題、なのである。

二、類型考察の必要性

歴史という時間の軸に、社会や文化生態といえ空間の軸を合せて複眼的にみたととき、華僑の性格や内部の構造、そして同化・異化の程度は、時代ごとまた受け入れ社会ごと、さらに華僑自身の母郷のちがいに実さままでである。分化ことは、華僑通の言説によく示されるところである。分化や差違がむしろ常道であるならば、華僑の歴史を世界システムのごとき超マクロ状況に一気に結びつける前に、発展的分化、社会別分化の類型を立てつつ考察することの方がより生産的であろう。

発展史からみると、第一、二期の華僑の主力は「華商型」であった。第三期のうち第一次世界大戦期までは「華工型」そしてこれと重なりつつ二〇世紀前半は愛国者「華僑型」が旺盛であった。第四、五期は「華裔型」の時代である。華裔ともいわれる現世代の華僑は、第三期ごろに胚胎してきた。しかし第四・五期の華裔は、アジア・ナシヨナリズムの渦中に生き、出稼ぎタイプの老僑、あるいは「華工」と異なつて、主体的に現地同化を考え、また機会に応じて第二、三の住地へ転進する傾きがある。右の四類型を通じて、「華商型」が発展的にも社会活動面でも、中心の柱をなしてきたことは認めてよいだろう。だが経済の

ナシヨナリズムの下で、また受入れ先の近代教育の普及のなかで、職業選択の教育を通じての公平化という動きが、華僑イコール商業独占者という旧態を変えつつある。

つぎに現地の華僑政策のちがいや、移民需要の性格のちがいや、勤労価値観や、文化そのもの、といった差が、異なる華僑の類型を生み出していることにも注目しよう。もともととは同化の障害が少なかったタイ社会と、植民者の分割統治策の下で異化を促されたジャワ社会は互いに対極にあり、またスペインの植民、宗教政策によって混血者の層位を生じたフィリピンも特殊である。さらに、かつて出稼ぎ華工を招き、一転して排華に傾き、そして民主主義あるいは文化的多元主義での国民統合を打ち出したアメリカとかオーストラリアの華僑は、東南アジアの事例とは異なるものとして見るべきだろう。